現代用語の基礎知識

時代の鼓動を反映する新語・外来語年鑑

1967

自由國民

事典版 1

「自由国民」第二三二号
昭和四二年一月一日
発行・昭和四〇年一〇月二七日国鉄特別取扱
承認雑誌第二一九〇号

最高筆者65氏分担執筆

時局用語
中村　哲
横田喜三郎
辻　清明
鵜飼信成
高木惣吉
高島善哉
長洲一二
山田秀雄
鈴木武雄
山口　茂
近藤康男
上坂酉三
山城　章
野田全治
大河内一男
武藤光朗
宮川　実
文化用語
高桑純夫
大畠　清
宮原誠一
戸川行男
林健太郎
西岡虎之助
辻村太郎
江上波夫
本多顕彰
今泉篤男
吉田秀和
山田　肇
科学用語
辻　二郎
茅　誠司
藤岡由夫
朝日奈貞一
湯浅　明
高橋吉定
杉靖三郎
宮木高明
萩原雄祐
竹内端夫
和達清夫
日常用語
大宅壮一
清水馨八郎
城戸又一
安藤和雄
阿部公正
春日由三
津村秀夫
織田幹雄
神田順治
服部良一
マダムマサコ
清家　清
氏家寿子
平井信義
黒田初子
吉川義雄
山野愛子
渡辺義雄
桶谷繁雄
木村義雄
高川　格
桑田忠親
福田蘭童
別編
吉田健一
野村正七
藤原弘達
竹内　実
佐藤　彰

自由国民社

現代中国地図

監修　中国研究所

この地図は中国側文献として「人民手册」65年版（大公報社刊），「中華人民共和国分省地図」63年版（地図出版社刊）および日本側文献として「新中国年鑑」66年版（中国研究所），「中国産業貿易総覧」（アジア通信社）を基礎にして作られたものです．

ソビエト連邦

モンゴル人民共和国

朝鮮民主主義人民共和国

大韓民国

日本

中ソ国境紛争地区

中国国境紛争地帯でインド側が古来の領土と主張する地域

中印国境紛争地区

新疆ウイグル自治区

チベット自治区

青海

甘粛

内蒙古自治区

黒竜江

吉林

遼寧

河北

山東

陝西

河南

江蘇

安徽

湖北

湖南

浙江

江西

福建

四川

貴州

雲南

広西壮族自治区

広東

台湾

ネパール

シッキム

ブータン

パキスタン

ビルマ

ラオス

北ベトナム

トンキン湾

海南島

第七艦隊

フィリピン

南海

東海

黄海

日本海

太平洋

ウランバートル

イルクーツク

ウランウデ

バイカル湖

バルハシ湖

アクトガイ

アルマアタ

カシュガル

タリム盆地

ウルムチ

ロプノル原爆実験場

玉門

酒泉

西寧

蘭州

青蔵公路（西寧―ラサ）

新疆公路（ラサ―カシュガル）

康蔵公路（雅安―ラサ）

原子力センター

成都

重慶

昆明

カトマンズ

カラチ

ラワルピンディ

マンダレー

ハノイ

香港

九龍

マカオ

台北

馬祖島

金門島

沖縄

ナホトカ

ハルビン

チチハル

長春

瀋陽

大連

旅大

撫順

鞍山

本溪

丹東

錦州

鶴崗

牡丹江

吉林

天津

唐山

太原

大同

石家荘

開封

洛陽

西安

宝鶏

蘭州

青島

済南

徐州

南京

上海

杭州

寧波

武漢

長沙

南昌

福州

厦門

広州

九龍

重慶

成都

昆明

中・米主要工業生産量比較（1964年）

	中国	米国
鋼塊	一，八五〇万t＊	一二，五二八万t
石炭	四三，五〇〇万t＊	四四，九四七万t
石油	九〇〇万t	三七，九〇八万t
発電量	五五〇億kwh	一〇，七八八億kwh

＊ 1960年の数字

工業都市と主要生産部門

ハルビン―機械，紡績，
チチハル―機械，鉄鋼，製糖，食品加工
長春―自動車製造，紡績
吉林―化学
旅大―造船，車両製造
鞍山―鉄鋼
撫順―化学（人造石油）
瀋陽―機械，治金，化学，紡績，食品加工
天津―紡織，製粉，化学
唐山―鉄鋼，機械，紡績
太原―鉄鋼，機械，化学，建築材料，紡織
油，車両製造，紡織機械
蘭州―石油精製，機械，化学，紡織
南京―化学，鉄鋼，機械，紡織，食品加工
上海―鉄鋼，電機，造船，紡織
武漢―鉄鋼，機械，化学
長沙―機械，食品加工，紡績
南昌―化学，製紙，紡績
広州―化学，機械，軽工業
重慶―機械，鉄鋼，化学，

凡例

国界
省界
鉄道
航空路
自動車道
首府
省都
主要都市
日本人の旅行できる都市
鉄鋼コンビナート
工業都市
炭鉱
石油（天然，人工）
米空軍基地

世界の政党の解説

藤原弘達
〔明治大学教授〕

監修に際して　世界各国には共通して政党が存在し、性格は国によって違うけれども、すべて一種の政党政治が行なわれている。最近誕生したばかりのアフリカ新興国のなかにも、さまざまな政党が形成されている。政党のあり方によって、それらの国の性格が左右され、そういうさまざまな国々のそれぞれ違った内外政治のやり方が、複雑にからみ合いながら、世界の政治が動いているというように表現することもできよう。世界が狭くなった割合に、世界の政治となるとまだまだ多くの人々にとって未知のジャンルである。各国の政党を通じて最小限度の政治知識をもつことは、そういう未知のジャンルを切りひらいてゆくうえに、最も確実性のある方法の一つであることを今更のように痛感している。

アジア

日本の政党　日本で最初にできた政党は、板垣退助らの自由党であり、一八八一年に創立された。以来八〇年余、その間に第二次世界大戦があって、大きく政治体制そのものは変わったけれども、本格的な政党政治が行なわれるようになったのはやはり戦後のことである。天皇制の下でも、日本の政党はいくたの離合集散をかさねて、必ずしも安定したものではなかったが、そういう傾向はけっこう民主主義をたてまえとした、戦後の政党政治にも引きつがれている。国民の評判があまりよくなく、一般に政党が不信の眼をもってみられるといった点、戦前戦後に共通した日本の政党の特色といって過言であるまい。

戦後一〇年近くは、占領体制下の事情などもあって甚しく安定を欠いていたが、一九五五年いらい保守対革新という二大政党対立の形が曲りなりにも確立されて今日にいたっている。もっとも二大政党対立体制といっても形だけのことで、実質は保守政党である自由民主党の一種の独裁、半永久政権に近い有様で、社会党など野党勢力をすべてを合わせても与党自民党に対して甚しい劣勢にある。野党のなかでは社会党が最も強く、断然、他を引き離してはいるものの、国会において単独三分の一に満たない勢力である。全体としても劣勢な野党が相互に反撥し合い、民社党、共産党、公明党などに分かれているのであるから、自民党はさほど労せずして政権を独占しつづけてきたといってもよい。

もっとも自民党自身、戦前の政友会、民政党に尾をひく自由党や進歩党、それに戦後新しくできた協同党など小党をだんだんと合併吸収し、政権を革新勢力に渡さないためにできた寄せ集めの大世帯であるために、さまざまな派閥競合のマイナスを背負っており、数の多数が必ずしもスッキリした政治指導力に発展しない欠陥と病理をかかえこんでいる。政党近代化の声が、十年一日のように唱えられるのもそのためであるが、これはひとり自民党のみの病理でなく、大なり小なり日本のすべての議会政党に共通する緊迫した課題になっているといって、決して過言ではあるまい。

自由民主党　一九五五年十一月に形成、直接的には自由党と日本民主党の保守合同によってできた。革新政党、ことに左

カメラ用語の解説

渡辺義雄
〔日本写真家協会会長〕

執筆に際して

経済企画庁の調べによると、カメラの普及率は昭和四十一年二月末現在で、全世帯別五二・九%という数字を示している。一家に一台の普及までには、まだ程遠いとしても、考えようによっては成人男女にかかわらず、一度はカメラを手にしているともいえるのである。とくに近年、機材、機能の開発と発展はいちじるしく、カメラ機構とかレンズ機能や撮影技術を身につけていなくとも、ボタン一つを押せば、人並みに撮影できるところまで進んでいる。当然カメラ人口もさらに増して行くことであろう。この欄では従来、趣味の部門に入っていたカメラ用語を独立させて、最小の知識としてこれだけであればという用語を収録した。向後この欄の拡大とともに、さらに多くの用語を精選していくつもりである。

カメラ

一眼レフ・二眼レフ　レフとは、ミラー・レフレックス・カメラ、すなわちレンズを透過した光をミラー（反射鏡）で屈折してピントグラスに投影させて焦点を合わせる式のカメラをいう。焦点調節用レンズと撮影用レンズの二つのレンズを備えたものを二眼レフ、両者兼用で一つのレンズを備えたものを一眼レフという。この型の特徴はピントグラスに画像が映るのでピンボケの心配がなく、そのうえ、ピントグラスにはフィルム面に映るのと同じ大きさで像が映るので、画面構成がとりやすい点にある。二眼レフは、構造上、撮影中もピントグラスの映像が消えないのにたいし、一眼レフは共用レンズのため、シャッターを押すと同時に反射鏡がはね上がって画像が消える欠点があるが、二眼レフはレンズ交換ができないのにたいし、一眼レフはレンズ交換ができるという利点がある。

システムカメラ（system camera）　キャノン、ニコン、ライカなどの35ミリカメラ、特に35ミリ一眼レフカメラは顕微鏡から望遠鏡の領域に至るまで交換レンズや附属品が開拓されており、想像以上に撮影範囲が拡大した。そのため、旭光学がそれらの附属品を組み合わせて使用するカメラということで、システムカメラという名称を使い始め、それが一般化している。

ハーフ・カメラ（half camera）　**ハーフサイズ・カメラ**の略。三五ミリ判の二分の一の二四×一八ミリの画面で、三五ミリフィルムを使用。一九五九年、オリンパス・ペンが発売されてから次第に普及、××ハーフの名称のもとに多くの種類が発売、大口径（f一・九）、EE、フィルム自動巻き揚げもある。小型、軽量、安価で、メモ代わりに三五ミリカメラの二倍も写せる点から、**ペンカメラ・メモカメラ**ともいう。なお、ハーフ・カメラは全部レンズシャッターであるが、最近はレンズ交換ができる一眼レフのハーフサイズも作られている。

EEカメラ　**エレクトリック・アイ・カメラ**（electric eye camera）の略で電子の眼のカメラ。フィルム感度がわかり、シャッター速度をきめれば、室内でも屋外でも、対象にカメラを向けたら絞りが自動的に開閉して適正露出をフィルムに与える機構になっている。最近ではシャッター速度も絞りも全部自

自動車用語の解説

桶谷繁雄
〔東京工業大学教授〕

執筆に際して

この数年来、モータリゼーションの普及発展は目ざましいものがある。それらに伴ない、新聞や週刊誌に自動車に関する欄が開設されつつある。したがって、今まで極めて限られた範囲で使用されるに過ぎなかった自動車関係の用語が次第に普遍化しつつある状況である。たとえば乗用車の型式についていえば、セダンとかライトバン或いはクーペなどは日常語になりつつある。そういう時点において、本書のようなものの存在は極めて高く評価されねばならないであろう。ただ、この版においては新しく設けられたばかりで、まだまだ不十分であるが、しかし、この程度でも、その有用度は高いと思われる。モータリゼーションの進展に伴なって、本欄も拡大されて行くことは疑いを容れないところであって、私は大いに期待しているのである。

乗用車の型式

セダン(sedan) 四人〜六人乗りの箱型の乗用車のことをいい、2ドアセダンまたは4ドアセダンがある。この呼び方はアメリカ式で、イギリスでは**サルーン**(saloon)、ドイツでは**リムジン**(Limuugin)という。またアメリカでいうリムジンは、最高級車のことで、例えば六人〜八人乗りで、リヤシートの前に補助席が付いていたり、運転席と後部座席の間にガラスの仕切りがついていたりする。

ステーション・ワゴン(station wagon) 乗用車と貨物車を兼備したものであるが、乗用を主な目的にしたもの。起源はアメリカの駅馬車から出たもので、沢山の荷物をもった家族で、長距離ドライブ旅行をするときなどに快適な車である。イギリスでは、**エステート・ワゴン**(estate wagn)、西ドイツではステーション・カーともいわれている。

ライトバン(lightvan) 日本独特のもので、ステーションワゴンと同様に乗用車と貨物車を兼備したものであるが、貨物を主な目的とした車のこと。日本の自動車道路使用税が、乗用車より貨物車の方が安いところからできた車である。

コンバーチブル(convertible) 幌型の乗用車で、普通2ドアが原則となっている。いわゆる、オープン・カーになる車。イギリスでは**ドロップ・ヘッド**(drop head)、ドイツで**カブリオレ**(Cabriolet)ともいわれる。また、これと似たもので**ロードスター**(road star)というのもあるが、これは幌が非常に簡単にできていて、普段は使わない。主に二人乗りのスポーツ・カーである。

クーペ(couupé) フロントシートが別々に二個あって、原則的には二人乗りのスポーツタイプの乗用車のこと。リヤシートは補助的のもので、実際にはあまり使わない。ドア数は二つである。

ハード・トップ(hard top) 幌型のことの別名、ソフト・トップ(soft top)というのに対して、天井が鋼の板やプラスチックでできているものをとくにいう。米車では窓の面積が広く、横枠のないものをいう。ただし、本来は、屋根がそっくり取り外せるものをいうのである。

スライディング・ルーフ(sliding roof) 天井の一部が後方に滑って開くようになっている乗用車のこと。布でできて

中国問題用語の解説

東京都立大学助教授　竹内実
サンケイ新聞外信部　柴田穂

執筆に際して

世界はいまや、三極構造に立つといわれているが、これはいうまでもなく、米中ソが来たるべき世界史の中における巨大な地位を示すことばである。しかもとりわけ中国の動きは、いかなる意味においても圧倒的な重みをもち、隣国の日本としては七億の民の動きに異常な関心を持たざるを得ない。ところで中国は「米帝国主義」と「現代修正主義」と腹背に二つの強大な「敵」を持ちながら、文芸整風、文化大革命などと呼ばれる偉大な試煉を自ら課して、新しい歩みをはじめている。これは一体何を意味するのであろうか。ここに収めた用語は現代中国の動きを理解するための最小のものにすぎないが、読者はこれからおおかたのスケッチは得られることと思う。なお本書の共産主義用語の「中国」の項とも合わせ読まれることを希望したい。

毛思想と文化革命

毛沢東思想　「毛沢東の思想」と「毛沢東思想」は区別しなければならない。前者は毛沢東が農民（および少数の労働者・知識人）を率いて、広大な中国の大地において、革命運動を推進するなかで産みだしたものであり、その形成過程に即して見る場合の対象となる。後者は中国共産党が提唱し、教化・宣伝するさいの用語であり、すでに〝権威〟となった、ただ学習するための対象である。

「毛沢東思想」という用語が、はじめて、公式に使用されたのは、一九四三年の劉少奇の論文からであるが、これは「マルクス・レーニン主義の理論と中国革命の実践とを統一した思想」と定義している。現在は、「マルクス・レーニン主義の普遍的真理と世界革命の具体的実践を結びつけたもの」で、「現代のマルクス・レーニン主義の最高峰」といわれるようになった。

しかし、その学習の実際をみると、むしろ「職域奉公」的に、自己の力量を職場で発揮するさいの啓示を仰ぐために、毛沢東の「実践論」、「矛盾論」等が読まれているにすぎぬ。その限りでは、これは人生哲学である。

じつは、このように理解させる要素が、「毛沢東の思想」にもあり、人間が自覚して実行すれば、環境・物質を支配できるとする「主観能動性」は精神至上主義であるし、「矛盾」といいながら、中国人に伝統的にある陰と陽の相互循環と同じ図式で考えようとする世界観は、必ずしもプロレタリアートのものではない。しかし、半植民地・半封建社会にあって、民族の解放を求めるとすれば、少なくとも中国においては、この思想は民衆の力となるものであった。今日、帝国主義支配を受けている地域の民衆が、中国革命とその原理である「毛沢東(の)思想」に関心をもつのも理由のないことではない。

社会主義文化大革命　「プロレタリア文化大革命」ともいう。中ソ論争にあたって、中国共産党は、現代修正主義批判をおこなったが、これが一転して、国内にむけられた。内容としては、労働者・農民・兵士が「毛沢東思想」を学び応用して、困難にうちかつ実践運動をいっているが、労・農・兵による知識人批判もきびしいものがあり、大学入試の半年延期、文化面の各機関責任者の免職など、ジャーナリズム、学術、文芸界の人

事の大異動も重要な目標となっている。この見地からの成果としては長編小説「欧陽海の歌」、泥塑群像「地主の家」、バレエ「白毛女」などまだわずかしかない。

「文化大革命」は六四年、現代もの京劇コンクールの頃から叫ばれていたが、重大化したのは六五年十一月、上海「文匯報（ぶんわいほう）」の歴史劇批判の論文によってである。はじめは北京市副市長・呉晗（ごがん）・田漢（でんかん）が批判されていたが、六六年五月、北京市の新聞に波及し、「三家村」グループが摘発され、北京市長・彭真が失脚した。六月、北京市委員会が改組され、各都市の大学でも、反党反社会主義分子の摘発がすすみ、七月、中共宣伝部長・陸定一、副部長・周揚の解任があきらかになった。文化大革命というが、「文化」だけでなく、中国が外交・内政とも、妥協・雪どけを否定し、強硬路線でやっていくための、思想統一運動であり、毛沢東とその後継者による、政治そのものとみなければならない。四月に、郭沫若の「自己批判」があり、外電の誤訳もあって、反響は大きかった。

毛沢東語録　毛沢東の百余編の論文から、毛沢東の思想と理論を集約的に表現した言葉と文章を抜粋、集録した、いわば毛沢東思想の入門書。中国人民開放軍総政治部が編集したもので、はじめ林彪の指示により、「開放軍報」紙上に掲載されたものを一九六四年五月に出版、六五年八月再版、以後「毛沢東思想」学習運動の昂揚とともに版を重ねている。「毛主席の書物を読み、毛主席の言葉に従い、毛主席の指示の通りに事を行なう」を扉の言葉に、前言と三三章、四三七項目を集録している。小学校、高等小学校ではその学習が必修科目となっている。

下放運動　党員や国家勤務員の官僚化を防ぐために、農村や工場に下って、労働に従事する運動。今では制度として規定されている。軍隊などでは司令官や将校などが、一兵士として、内務班に起居・生活することもやる。

「半工半読」　農業中学などで実施されていた制度で、半日労働・半日授業のこと。生産から切り離すことなく学校生活を送ることは、中国の現実に合致しており、かつ、消費生活に憧れる戦後の若い世代に対する思想教育としての効果もある。この制度は、近く大学にも全面的に採用されようとしている。

反面教師　中共では、全世界人民に反動的な悪い面を教えてくれる裏側の教師という意味で、一九六四年頃からここ二・三年間頻繁に使われ帝国主義者や各国反動派、現代修正主義者などを指している。毛沢東は、「革命的政党と人民はいつも肯定面と否定面の両面からの教育をくりかえし受け、比べ合わせてこそはじめて鍛えられ、成熟してゆく」と述べており、中共は肯定面の教師（マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン）だけでは不充分で、悪い見本のみせしめとなる、否定面の教師がなかったら、人民の革命は、勝利の方向に進まないとしている。

欧陽海の歌　一九六五年十二月に出版された長編小説で、社会主義時代の英雄像を描いて成功した作品。作者は、三六歳（六六年現在）で中共党員の金敬邁。欧陽海は小説の主人公で、かつて実在した人民解放軍の一兵士。六三年十一月行軍中、砲座を背負った馬が鉄道線路にかけ上がり、疾走してきた旅客列車と衝突しようとした時、欧陽海は列車の乗客を救うため馬を線路の外に押出すため、みずからの生命を投げうった。陳毅副総理はこの作者と会ったとき、「中国文学創作史上の新しい里程標」と讃え、郭沫若科学院長は六六年四月十四日、全国人民代表大会常務委で自己批判を行なったとき、労農兵大衆の毛沢東思想学習の高い水準の一例として、「欧陽海の歌」をほめちぎった。

歴史劇・現代もの京劇　一九六〇～六一年にかけて、創作歴史劇のブームがあった。郭沫若「武則天」、曹禺「胆剣篇」、呉晗「海瑞罷官」、田漢「謝瑤環（しゃようかん）」、孟超「李慧娘」等である。地方劇で、古い伝統的なレパートリーを改作して上演することも、さかんに行なわれたらしい。それは中国の民衆に、歴史物語を愛好する傾向が強いのと、一部に歴史に仮託して政治を風刺する創作意図があって、この流行を来たしたようである。これに対し、現代を題材とした新作を上演することが、京劇界で起こり、六四年七月には、そのコンクールが北京でひらかれた。これには中共

るまで、常に深刻な内部対立がつきまとって離れない。左派は労資間の階級闘争に重点をおいて、議会内よりも外での労組を主体とする大衆行動に、社会主義革命のエネルギーと政党の指導性を集中すべきであるという考えにたっている。右派は、といってもすでにその一部が民社党をつくって分裂しており、それほど右ではないが、階級闘争そのものは承認するけれども、戦後における民主主義の定着効果や社会経済の大きな変化によっておこった階層や意識のズレにピントを合わせた柔軟な戦術の必要を主張しており、自民党のニュー・ライトに見合うニュー・レフトを志向しているといってもよい。

毛沢東が、かって日本の社会党を「世にも不思議な政党である」と評したことがあるが、それはイデオロギーや左右の対立をはらむ複雑さだけについていえることではない。政党としての組織や人事、財政といった点になると、必ずしも自民党の前近代性をあざ笑えないくらいに、さまざまな問題点をもっており、派閥争いもけっこう相当なものである。「総評の番頭」と呼ばれるくらいに、労組一辺倒的であり、党員も数万にすぎず、しばしば頭デッカチの逆ピラミッド政党といわれているくらいである。

安保廃棄を主張し、反米闘争に大きな比重をおく運動の姿勢にもかかわらず、そのエネルギーはしばしば空転しており、次次と新しい角度から国家利益・国民利益とでもいうべきものを打ちだしてゆく柔軟性に欠けており、それだけに護憲のスローガンのうえにアグラをかいて、いささか足ぶみしている観なしとしない。

戦前からの社会運動家出身のリーダーたちはどんどんと死んだり、年をとってゆき、戦後はもっぱら労働組合出身の指導者しか育てていない社会党は、その支持層の基盤においても甚しく閉鎖的な側面をもっており、それが強力な国民政党への脱皮をチェックする内的な原因になっているともいわれる。そしてともすれば万年野党第一党といったところに定着してしまい、口でいうほど革命的でもなくなり、むしろそれなりに保守化してきている傾向さえでてきている。かって圧倒的であった青年層の支持にしても近来とみに低下してきており、そのうえ内部のゴタゴタが絶えないところから、自民党ともども二つくらいに分裂し、小党分立状態からやりなおさないことには、自民・社会の二大政党対立は、どうにも相撲になりそうにない形勢であるが、その大半の責任は、自民党よりも社会党が負うべきものだといってもよいであろう。それだけに社会党内におけるジレンマの色は濃く、外見の虚勢とは、甚しいコントラストをなしているといっても過言でない。

民主社会党　一九六〇年一月に西尾末広を中心とする社会党右派勢力の一部が党を脱退し、新たにつくられた社会主義新党である。社会党が総評をバックにしているのに対し、民社党は全労→同盟系労働組合をスポンサーにして成立したということもできるが、同時に西尾委員長の個人的な政治力やイデオロギーに負うところも大きい。結党宣言でもうたっているように、左右の独裁を排除し、日本の政治をゆがめている多数横暴（つまり自民党）、少数暴力（つまり社会党や共産党）を是正することによって、議会制民主主義のルールを守りながら、漸進的に社会主義を実現することを目標とする訳であるが、いうことがもっとも過ぎて実効のともなわないところから「評論家政党」などと評する向きもある。事実、選挙に当たっても、必ずしもそれほど国民的支持をうけたとも思えない停滞を余儀なくされている。わるくすると「保守第二党」的な役割を果たす可能性もあり、ネライとしては英国の労働党あたりのイメージであるが、必ずしもひろく大衆にアピールできないという皮肉な運命にあえいでもいる。現実は、どっちつかずのヌエ的中間政党といったうけとられ方が圧倒的である。これは、さなくても保守政党の実質的独裁体制になっている日本政党政治のなかで、弱い方の革新勢力をば、さらに弱めることになったという客観的な力関係からも、社会主義政党とはいいながら、その野党的バイタリティにおける限界を示すものにはほかならない。そのため反共主義の面だけがクローズアップされ、この政党独自の持ち味といったものは、議会内においても必ずしも発揮されて